

**技術を身に付けて
途上国で仕事をしたい**

「ナマステー！（おはよう！）」
朝7時、町外れにある小さなスラムに入っていく山形洋一さん。そこに、彼の姿を見つけた子どもたちが、わーっと駆け寄ってくる。このスラムは、山形さんの朝の散歩コース。「最初はかなり警戒されてたんですよ。でも、怪しいやつじゃないと分かってくれたのか、だんだん受け入れてくれるようになって。今ではみんな友達です」。インド中部のマディヤ・プラデシュ州で「リプロダクティブヘルスプロジェクト」に携わって4年。彼らとの触れ合いは欠かせない日課だ。

山形さんが、国際協力と出会ったのは約40年前。ネパールのNGOで働く大学の先輩を訪ねたことが一つのきっかけだった。現地の人々のため、医療活動に汗を流す先輩の姿を見て、「自分も何か技術を身に付けて、開発途上国で仕事をしたい」と強く思った。「それと、へき地と呼ばれるところに長く住んでみたかったんです（笑）。若いころからとにかく好奇心旺盛でした」。

初めて国際協力の実務に携わったのは、害虫学を研究していた大学院時代。1976年、JICAがグアテマラで実施している「オンコセル

カ症研究対策プロジェクト」に専門家として派遣された。そこでまず取り組んだのが、感染の原因となるブユの分布図の作成。気が遠くなるような作業に顔をしかめる研究者もいたが、山形さんは率先して地図を片手に急な山道を走り回った。
そして85年、今度は世界保健機関（WHO）のプロジェクトに参加するためアフリカに赴任。「欧米人のスタッフと肩を並べ、ダイナミックな仕事ができたと」言うが、「その分、現地の人とかかわりが少なかった。国際協力は草の根レベルから」という考えがあったので、どこか違和感があったんです。
そんな思いから、91年、自ら現場にも足を運べるJICAの国際協力専門員（以下、専門員）に。タンザニアのマラリアや中南米のシャーガス病対策などのプロジェクトでは、それまでの経験が大いに役に立った。



(上)プロジェクトで試験的に導入した「母子健康カード」について准看護助産師たちと話し合う
(下)研修では、プロジェクトで考案されたさまざまな教材が使用されている。「実践的で分かりやすい」と評判(撮影:久野真一)

JICA国際協力専門員
Yamagata Yoichi
山形 洋一さん



スラムの子どもたちと。山形さんのスケッチブックは、彼らの似顔絵でいっぱい。2007年には、デリー市内でこれまで描いたスケッチの個展を開いた(撮影:久野真一)



インド人の顔が見えるプロジェクトを

インドのマディヤ・プラデシュ州でJICAの「リプロダクティブヘルスプロジェクト」の構想が動き始めた2000年11月。
「これはチャンスだ」

山形さんは、真っ先にチーフアドバイザーのポストに手を挙げた。「実は学生時代、バックパッカーの旅をしたとき、インドの『深さ』にすっかり魅せられてしまっただけ。いつか、絶対にここで仕事がしたいと思っていました。専門員の任期も残すところ10年余り。すべてをインドにささげることになった」。

マディヤ・プラデシュ州は、インドで最も貧困層が多いとされる4州の一つ。地方に行けば行くほど医療サービスは劣悪。中でも、妊産婦死亡率の高さが深刻な問題となっていた。まず何から改善すればいいか

。山形さんは現場視察を繰り返し、患者と最も近い立場にある「准看護助産師」に目を付け、彼女たちの研修に取り組みことにした。血圧の測り方、胎児の心音チェックの方法、赤ん坊のくるみ方など、まずは現地の講師が手本を示し、それを見て自分自身で試しながら学ぶ方式。その実践に即した内容、親身になって指導してくれるプロジェクトのスタッフに対し、「JICAの研修は『味がある』と評判も高いという」。

プロジェクトチームは、山形さんを含む7人。アイデアに詰まると、必ず全員でブレインストーミングを行う。「常にポジティブに、『何か新しいことができる』という考えでやっています」。この秋からは、新たに青年海外協力隊4人の赴任が決まった。「これまで私たちが気付かなかった細部にも手が届くようになって。お互いに学び、成長していきたい」と意気込む。

25年前から独学でスケッチを始めた山形さんは、行く先々で、目にした風景、出会った人々などを描いている。「外の世界と向き合っていると、どこまで理解できているのか、それを確認する作業でもあるんです」。

「国際協力は現地に自分のコピーを作っても意味がない」と強調する山形さん。「それぞれに違いがある

からいい。インド人の『顔』が見えるプロジェクトにしていきたいと思っています」。

そんな彼の夢は、この仕事を引退したら画家としてインドに永住すること。この国の未来は、山形さんの筆でどう描かれていくのだろう。その答えは、数十年後の彼のスケッチブックの中にあるはずだ。

やまがた・よういち

1946年大阪府出身。東京大学大学院農学研究所博士課程修了。77～79、81～84年、グアテマラ「オンコセルカ症研究対策プロジェクト」にJICA専門家として赴任。85～89年、世界保健機関のプロジェクト(ブルキナファソ、トーゴ)に参加。91年より現職。タンザニアのマラリア対策、中南米のシャーガス病対策など数々のJICAの感染症対策プロジェクトに尽力。2005年より、インドのマディヤ・プラデシュ州の「リプロダクティブヘルスプロジェクト」(www.jicamprrhp.org/)のチーフアドバイザーを務める。著書に「国際協力専門員」(共著・新評論)ほか。



単身赴任の山形さんを気遣い、お昼にはスタッフが料理を持ち寄って食卓を囲む。「優秀なスタッフに囲まれて幸せです」。山形さんの家族も、日本から彼の活動を応援している(撮影:久野真一)

「途上国の仕事は“違い”を尊重してこそ一つになる」

国際協力の世界に足を踏み入れて30年以上。人生の大半を開発途上国での仕事に費やしてきた山形洋一さん。中南米、アフリカで感染症対策に取り組んだ後、若いころからあこがれていたインドで、妊産婦と赤ちゃんの命を守るため、日々汗を流している。

第11回

ゲンバの風

